博士論文の要旨及び審査結果の要旨

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 志田久美子 |
| 学　　位 | 博士（保健学） |
| 学位記番号 | 新大院博（保）甲第２２号 |
| 学位授与の日付 | 平成３０年　３月２３日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当 |
| 博士論文名 | スピリチュアルペインを抱える看護師のディグニティセラピー<br>ーその活用方法の検討と介入後の変化のプロセスー |
| 論文審査委員 | 主査　中村　勝<br>副査　村松芳幸<br>副査　小山千加代 |

博士論文の要旨

本論文の目的は、ターミナルケアに携わるスピリチュアルペインを抱えた看護師にディグニティセラピーを実施し、その活用方法を検討するとともに介入後のスピリチュアルペインの変化のプロセスを明らかにすることである。

論文は6つの章立てで構成され、主な成果は第3章以降にまとめられている。

第 1 章では研究の着想に至る学術的背景と研究の概要が述べられている。ターミナルケアに携わる看護師はスピリチュアルペインを負いやすいという指摘があるが対応が遅れている。そこで患者用に開発されたディグニティセラピーを看護師に活用することで効果が期待できる可能性が述べられている。

第 2 章ではチョチノフが開発したディグニティセラピーの概要や看護師のスピリチュアルペインに関する国内外の研究成果と課題が述べられている。

第 3 章では予備調査としてディグニティセラピーを看護師に活用するため、ターミナルケアに携わる看護師 3 名を対象に導入方法を検討している。その結果、対象者には進め方を説明する際に「質問紙」「看護師のためのディグニティセラピーノート」を渡し、1 週間後にターミナルケアにおけるスピリチュアルペインの体験（30 分）、ディグニティセラピーの質問（30～60 分）について語ってもらう。1 週間後、生成継承性文書を対象者に確認し、編集･修正する。さらに 1 週間後、完成した生成継承性文書を対象者に渡し、2 週間以内に大切な人と生成継承性文書の内容について話し合ってもらう。看護師に活用するディグニティセラピーとして、これらの検討を行ったことが述べられている。

第 4 章では本調査の結果が述べられている。対象者はターミナルケアに携わる看護師 10 名、調査方法は半構造化面接法による情報収集と修正版グラウンデットセオリーアプローチの手法を参考にした質的分析である。その結果、看護師は【スピリチュアルペインの現出】を体験していた。ディグニティセラピーによる介入後、スピリチュルペインの体験を語ることで【スピリチュアルペインについて語ることによる視点の転換】がなされ、スピリチュアルペインが緩和し、ディグニティセラピーの質

問に答えることで【自分らしさの気づき】がもたらされ、生成継承性文書を大切な人と話し合うことで【看護師としての希望を見出す】に至り、スピリチュアルケアとしての効果が示唆された。一方で[掘り起こしたくないスピリチュアルペイン]と捉えていた看護師が１名いたことが述べられている。

第 5 章では一連の結果に対する考察が述べられている。ディグニティセラピーの介入によって視点の転換がもたらされ、スピリチュアルペインが緩和し、自分らしさの気づきや看護師としての希望を見出し、他者への思いやりが生まれたことからスピリチュアルケアとしての効果が示唆されたこと、また本研究によってスピリチュアルペインとなった辛い体験をセラピストに語ることで自分の存在価値を認めることができ、生成継承性文書を大切な人と共有することによって自分の存在価値を確信する効果が見出せたことが述べられている。

第 6 章では結論として、本研究における介入方法がスピリチュアルペインを抱える看護師に活用可能であることが示唆されたと述べている。

審査結果の要旨

本論文では末期患者の尊厳の維持のために考案されたチョチノフのディグニティセラピーを一般病棟のターミナルケアに携わる看護師に試みた研究であり、ディグニティセラピーを看護師に活用する可能性を見出した点において評価できる論文である。

論文名に介入研究とあるため、介入群と非介入群の比較もしくは介入前後の比較研究かと思われたが、修正版グラウンデットセオリーアプローチの手法を参考にした質的分析が行われており、あまり見られない介入研究と思われた。修正版グラウンデットセオリーアプローチが介入研究に適する方法かは懸念されるが、専門家の指導を受けたうえの判断でありここでは深く立ち入らない。しかし分析結果としてのスピリチュアルペインの変化のプロセスには興味深いものがあると考えられる。

論文の構成については、予備調査を行った結果、どのように修正し、本調査を行ったのかが順を追って記述されている必要がある。論文中の記述に齟齬を来たしているとすれば修正が望ましい。

介入を行った対象者については、現在苦悩している看護師ではなく、以前苦悩したことのある看護師と思われるが、どのような方法で対象者を募ったかは丁寧に記述する必要がある。対象者数については論文中には「修正版グラウンデットセオリーは度数による分析ではないので、対象者の数が最低何人必要かという問題はない」とあるが、研究のタイプを考慮した場合、適した対象者数はあると考えられ、対象者数の根拠などについても記述され、配慮されていればさらに深い検討が可能になったのではないかと思われる。

難点をいえば、この研究ではスピリチュアルペインを語る面接のあとにディグニティセラピーの面接が行われ、スピリチュアルペインを語ることも含めてディグニティセラピーと記述されている。この点は明確に分ける必要があると考えられるので注意されたい。それに伴い、成果としてのスピリチュアルペインの緩和が面接の語りによる変化の表れなのか、ディグニティセラピーによる変化の表れなのかが判断しづらくなってしまったと指摘できる。

面接はセラピストによって対象者の反応が変わることが推察されるが、「セラピストに認めてもらって嬉しかった」という感想があることについては、研究者に対する好意的評価の一つと捉えることができる。

発表内容はよく整理されており、分かりやすく、総じて質疑に対する応答も明確であった。